

## 五百年間の溝が埋まる

松浦 純子

イギリス国王チャールズ三世は十月二十三日、ヴァチカンを国賓として訪問し、イギリス国教会の首長として初めて公の場でローマ教皇レオ十四世と並び祈りをささげた。レオ十四世が共に祈ることを提案すると国王がこれに応え、王妃と共に祈りの言葉を口にしたということだ。

システムイーナ礼拝堂で行われたこの礼拝では教皇や国王が、ミケランジェロが制作した「最後の審判」の前に座って行われた。写真を見ると、中央には教皇が座り、向かって右側にイギリス国王と王妃が座っている。この絵を含めてキリスト教の絵画では、左上に天国に行く人々、右下に地獄に落ちる人々を描くそうだ。イギリスの国王夫妻はカトリックでは認められない離婚をしたから地獄に落ちる人の近くの席なのかと勘ぐつた。

この礼拝の一一番の意義は両教会が五百年間の溝を埋めたことにあるということだ。

五百年前の出来事とは以下の通り。イギリス国王ヘンリハ世の王位継承は当初から予定されていたものではなかつた。父ヘンリ七世の長男で国王になるはずだった兄アーサーは国王に即位する前に十五歳で亡くなつてしまつた。ヘンリハ世は未亡人となつたスペイン出身の妻キャサリンと結婚することを望んだ。兄の未亡人と結婚すると不幸になるという言い伝えがあり、さらに聖書にも抵触するが、教皇の特別な計らいで結婚が認められた。当時イギリスは三流国、スペインは一流国。ヘンリハ世としてはどうしても実現したい結婚だつた。宗教改革真っただ中のヨーロッパでは、彼はカトリックを擁護し、教皇から「信仰の擁護者」の称号を得た。

しかし、男子の跡継ぎが得られないまま月日が過ぎると、ヘンリハ世は離婚に反対の側近たちを逮捕処刑してまで、離婚を急いだ。一五三四年に国王至上法を制定し自らイギリス国教会の首長となるとともに、カトリック教会から離脱した。男児を得るために六回結婚したが、病弱のエドワード六世を得ただけだつた。彼も十五歳で亡くなつた。